

機関番号：34404
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008 ～ 2010
 課題番号：20580253
 研究課題名（和文） 日本農学原論を構築するための大正・昭和期における日本農学史の実証的研究
 研究課題名（英文） An empirical study of Japanese agricultural history during the Taisho・Showa periods to establish a philosophy of agricultural science
 研究代表者 徳永 光俊 (TOKUNAGA MITSUTOSHI)
 大阪経済大学・経済学部・教授
 研究者番号：30180136

研究成果の概要（和文）：本研究は、これまで十分になされてこなかった日本農業の歴史と農耕文化に根ざした日本農学原論を構築するために、大正・昭和期において日本農学がどのように展開してきたかを、史料調査と農家からの聞き取り調査に基づきながら、実証的に明らかにした。欧米農学を融合しながら日本農業の伝統に根ざして作られてきた日本農学の基本的な哲学、原論的理念を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：To establish a philosophy of Japanese agricultural science based on the history and culture of Japanese agriculture, which has not been adequately performed, this study empirically clarified the development of Japanese agricultural science during the Taisho・Showa periods by a survey of historical materials and an interview survey of farmers. This study clarified the basic philosophy and philosophical ideas of Japanese agriculture that have been developed based on Japanese agricultural tradition while merging with Western agriculture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：農学

科研費の分科・細目：農業経済学・農業史

キーワード：いのち 風土技術 養育技術 動態的風土均衡論 日本農法史 日本農学

1. 研究開始当初の背景

日本農学史に関するこれまでの実証的な研究に関しては、欧米農学史の実証的研究（たとえば飯沼二郎、加用信文、岩片磯雄など）に比べてはるかに少ない。

江戸農書については古島敏雄『日本農学史第1巻』（1946）があり、史料集としては『日本農書全集』全72巻（1973～99）がある。明治期の老農や試験場などをめぐる詳細な研究は、斎藤之男『日本農学史』『同第2巻』

(1968 1970)がある。史料集としては『明治農書全集』全 13 巻 (1983~86)、『明治大正農政経済名著集』全 24 巻 (1975~77)がある。

しかし、大正・昭和期の日本農学史に関する実証的な研究は、農本主義の研究(綱沢満昭、斎藤之男、武田共治、岩崎正弥など)の他にはすすんでいない。戦前期から戦後にかけて農村において一時的に流布したいわゆる民間農法(岡田茂吉、島本覚也、山岸巳代蔵、楯崎阜月など)にいたっては、実証的な研究はほとんど行われていない。

本研究は、こうした研究状況をふまえて、各地で老農、篤農、精農などと呼ばれて活躍した農家の活動を発掘して史料として記録するとともに、当時の活動を覚えている農家から聞き取り調査を行い、検討しようとするものである。

さらには、1974年頃より盛んとなる有機農業、自然農法の活動についても、日本農学の一齣として、調査を行う。今後の日本農業を考える上で重要である。

2. 研究の目的

日本農学原論という言葉は、まだない。柏祐賢『農学原論』(1962)、祖田修『農学原論』(2000)の依拠するのはドイツ農学である。宇根豊は『天地有情の農学』(2007)で、日本の農家の情感に根ざした農学を構築する重要性を強調している。

本研究は、宇根の主張に共感しつつ、日本農学原論を構築するための基礎作業として、この3年間の研究期間中にこれまで不十分であった大正・昭和期の日本農学史の実証的な研究を行おうとするものである。

3. 研究の方法

第1に、研究の基礎となる日本農学原論の

研究史整理を行う。そのための文献・資料収集に努める。

第2に、大和郡山市の堀内金義氏からの聞き取り調査と奈良県内の篤農家たちの調査を行う。また、山形県村山市の門脇栄悦氏と東北地方の農村調査を行う。

第3に、戦前・戦後に熊本県を中心に活躍した松田喜一に関して、研究を行う。彼に関する文献・資料収集に努めるとともに、熊本での現地調査を行う。

以上の研究成果については、私が主宰する関西農業史研究会で発表する。

4. 研究成果

(1) 農業技術の新たな見方

農業技術にはその地域の土地自然条件を受容しながら折り合いを付けて適応しようとする「風土技術」的側面と、作物そのものに目を向けて能動的に肥培管理していこうとする「養育技術」的側面の二つがある。風土技術は、受容的で容器装置的であり、地域文化と長い歴史によって形成された「体験知」がものをいう。この風土技術には、マクロ的なもの(たとえばモンスーン地帯)と、微気象・微地形などのミクロ的なものがある。マクロ的風土には農家はほとんど受容、適応し、ミクロ的風土に対しては、ある程度の改変が可能であり、村・地域ぐるみで取り組むことが多い。農家が個別に改良しやすいのは、能動的・手段体系的・個別管理技術の養育技術であり、「科学知」の応用が利きやすい。たとえば、肥料や農薬、農具、機械などである。

両者、および各要素は「生態均衡系システム」として連動しており、生物生産であるが故に、それぞれが勝手に展開することはできない。戦前期までは、これらの側面をうまく調和させながら農業が行われており、アカデ

ミズムの「科学的農学」とは別に、松田喜一らの篤農が独自の「日本農学」を展開していた。彼らには、自然、「いのち」への畏怖があった。

(2) 日本農法史の新たな見方

これまでの日本における農法史研究には、大きく二つの流れがあった。一つは、加用信文の『日本農法論』(1972)や『農法史序説』(1996)に代表されるもので、農法とは生産力＝技術的視点から見た農業の生産様式のことであり、焼畑式→三圃式→穀草式→輪栽式と発展していき、これは世界史的な発展段階論的な法則であるとされた。日本農法は中世・近世は水田・畑とも主穀式(一圃・二圃式)であり、近代にも変わらず、外部からの金肥の多投、浅耕の遅れた封建農業と規定された。

これに対し、飯沼二郎は、『農業革命論』(1956 1967 1987)や『風土と歴史』(1970)において、雨量と平均気温からなる風土を重視し、世界を4農業地帯に区分する地域類型論を提案した。各地域は異なる発展をする事を強調した。農業革命とは異質な技術が馴化される過程であり、飛躍的な生産力発展が実現されるとした。日本では、福岡農法・耕地整理法により農業革命が実現したと考えた。

従来は両者の異質性が強調されてきた。しかし、両者はいずれも1950～70年代に研究をしてきた時代性ゆえに、「近代化」という問題意識では共通していた。明治維新はブルジョア革命かどうかの論争になぞらえれば、加用は近代化されずに遅れた日本のままであり、飯沼は農業革命によって近代化されたと考えたのである。両者の見方は、現代農業問題に果たして有効だろうか。

上述の「生態均衡系システム」だけでなく、一つは祖田修が言う、動態的過程と静態的構造、淘汰原理と共存原理が統合される「形成

均衡の場」の考えに着目する(『農学原論』2000、『食の危機と農の再生』2010)。

もう一つは、最近注目されている福岡伸一の「動的平衡」論(『生物と無生物の間』2007、『動的平衡』2009など)を参考にする。生命とは、絶え間なく壊される秩序にある動的平衡の流れにあるという。

これらの見方を参考にしながら、日本農法史の新たな見方として「動態的風土均衡論」を提案する。発展段階論でもなく地域類型論でもない、風土技術と養育技術を統合させながら自然と折り合いをつけてきた、新たな日本農法史の見方が必要である。

(3) 日本農学原論の新たな見方

「生きる」と「殺す」、「共生」「存続」と「排除」「破壊」の絶対的矛盾関係にこそ、農業の本質がある。その矛盾を統一する農業のあり方こそが、農業と地球環境の永続性を保証する未来の農業といえよう。

私はこれまでの日本農法史研究において、「作りまわし」という循環と「作りならし」の平等が日本農法を貫く2つの原理だと主張してきた。さらには、「作りまわし」から生物世界全体の食べて食べられながら、「生きる」と「殺す」を繰り返しながら、生き続ける「食べまわし」の世界へと展開する。そして、農・食・医・育など「いのち」にかかわる人間社会の「世まわし」の循環原理が構築される。最終的には、生きものすべての「生きまわし」の循環世界に辿り着くのである。私は、「生きまわし」という言葉を造語して、農業の不可欠性を提起したいと思う。「いのち」を「在地」という場で現象させる農業をこの天地から消滅させてはならない。「生きまわし」の断絶は、人類・地球の消滅なのであるから。

江戸時代の思想家である安藤昌益は、「転定(天地)ノ呼息ハ男女(人)ノ吸息ナリ、

男女（人）ノ呼吸ハ転定（天地）ノ吸息ナリ」と述べた。まさに「息まわし」の世界である。

西田幾多郎のいう「絶対矛盾の自己統一」、中山延二がいう「矛盾的相即」、森信三がいう「全一学」、鈴木亨がいう「存在者逆接空」とは、このようなことではないだろうか。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

徳永光俊「東アジア農業を比較史的にどう見るのか（1）—日本農学原論のための予備的考察—」（『大阪経大論集』第61巻1号 2010年 119～126頁）

徳永光俊「東アジア農業を比較史的にどう見るのか（2）—日本農学原論のための予備的考察—」（『大阪経大論集』第61巻2号 2010年 259～272頁）

〔学会発表〕（計2件）

徳永光俊「現代日本農法論の構築に向けて」（関西農業史研究会 2009. 9. 12）

徳永光俊「農法史からみる日本農学原論序説」（関西農業史研究会 2010. 10. 9）

〔図書〕（計2件）

徳永光俊「江戸農書に見る『勤勉』と『自然』—『百姓の道』を生きる農民世界—」（大島真理夫編著『土地希少化と勤勉革命の比較史』 ミネルヴァ書房 2009年 125～164頁）

徳永光俊「日本における農法の改良と持続—在地・外来・在来—」（勝部真人編著『近代東アジア社会における外来と在来』 清文堂 2011年 25～40頁）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

徳永 光俊 (TOKUNAGA Mitsutoshi)

大阪経済大学・経済学部・教授

研究者番号：30180136